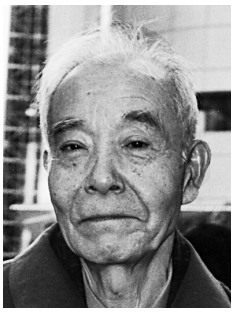
歴史地理学会との関わり

立　石　友　男



日本歴史地理学研究会と私の接点は，昭和33年の同会発足時にさかのぼる。私は，おそらく会の発足時から会員になっていたのではないかと思う。記憶が少しあいまいになっているが，発足の前年にあたる昭和32年の秋ごろに，第１回大会の開催に向けた準備のための会が開かれたように思う。その会場は，確か，現在の日本大学法学部図書館となっている日本大学本部の２階であった。私はその準備会に，埼玉県内での摘田を見に行った帰りに駆けつけたと記憶する。

日本歴史地理学研究会への入会を私に勧めてくださったのは，籠瀬良明先生であった。それと並行して，郵便による同会への入会案内も受け取っていたように思う。籠瀬先生は，当時，横浜市立大学勤務であったが，非常勤講師として日本大学でも講義を担当されていた。その時，私は日本大学大学院の修士課程に在学中であった。

日本歴史地理学研究会発足から１年経った昭和34年の４月に，私は日本大学の副手に就任した。続く昭和35・36年には，飯本信之先生を団長とする日本大学の津軽半島共同調査が実施され，その中で私は林業に関する調査を分担することになった。これが契機となり，私は林業への関心を持ち続けることになった。この共同調査には，当時日本大学の教授であった辻村太郎先生や冨田芳郎先生も参加した。

このころの日本大学は，大きな変化の時期であった。文理学部の地理学科が昭和33年度に発足し，第１回の学生募集を開始した。いっぽう，文学部の人文地理学科は昭和36年度末で閉鎖されることになった。地理学担当のスタッフは必ずしも文学部から文理学部へ異動をされたわけではなく，内田寛一先生や浅井得一先生は退職となった。日本歴史地理学研究会が設立されたのは，この時期とほぼ重なっている。日本大学がこのような移行期にあったにもかかわらず，日本歴史地理学研究会の第１回大会が日本大学で開催された理由は私にはわからない。これは私の想像であるが，第１回大会を日本大学で開くことは，日本大学内部にさまざまな変化が起こる以前から決まっていたのではなかろうか。

発足期前後の日本歴史地理学研究会において，私は菊地利夫先生と特に個人的な接点があったわけではなかった。会の実務を担当する中で交流が生まれ，深まったものと考えている。歴史地理学会と名称が変更された後も含め，会長や常任委員長を仰せつかったり，大会・例会の会場校になったりと，多くの方々の協力をいただきながら，会との関わりが深まった。

昭和40年代半ばから昭和50年代後半にかけて，晩秋から冬にかけての例会は毎年日本大学文理学部が会場となっていた一時期があった。この例会では，開催の時期が年末に近いことから，忘年会という意味合いをこめて懇親会を開催した。当時は，学会を開催すると日本大学から懇親会の補助金が支給されたので，このような会の開催が可能であった。日本大学側の協力体制とルールに基づいておこなってきた懇親の機会ではあったが，この懇親会が一個人からの資金援助に依拠するよう

に見えたり，教室の宣伝行為であるなどとして誤解されては不本意であるので，数年間続いたこの慣例を我々の手で打ち切りにしたことも，今となっては懐かしい思い出である。

打ち切るといえば，32号まで刊行した「歴史地理学紀要」を廃止し，会誌への統合をおこなったのは，私が常任委員長の時であった。「歴史地理学紀要」は東洋社印刷で作っていたが，同社には日本歴史地理学研究会・歴史地理学会の財政状況が苦しいときに，たいへんお世話になった。この東洋社印刷を紹介してくださったのは，浅香幸雄先生であったと記憶している。浅香先生は，畠山財団からの助成金獲得の道を拓いてくださった。畠山財団の助成金は，「歴史地理学紀要」刊行のための資金としてたいへん有益であった。

また，中田榮一先生はおひとりで学会事務局を引き受けられ，経費節減のため奥様も動員して宛名書きをされていた。このほかにも，日本歴史地理学研究会・歴史地理学会の発展には，多くの方々の地道な協力がある。

「歴史地理学会会報」の作成では，丹治健蔵さんが尽力された。籠瀬先生は，日本大学の通信教育で指導した学生にも歴史地理学会への入会を勧めておられ，それに応じて実際に入会された方もおられる。このことなどからみて，籠瀬先生は，歴史地理学会が一家を成した学者だけを尊ぶような雰囲気にはしたくないと考えられたのではないか。私はそのように思っている。

（元会長）

注：本稿は2007（平成19）年1月14日に実施したインタビューの要約である。インタビューの聞き手は小口千明（筑波大）が担当し，文章化は小口がおこなった。